
雨天接吻

.png

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨天接吻

【Nコード】

N0188J

【作者名】

.png

【あらすじ】

前に書いた「禁忌邂逅」の水夏視点の恋愛物です。
恋愛ものを書いたのは初めてで酷い出来・・・。

「——水夏。」

まどろみの中いつも通り彼の声が聞こえる。・・・様な気がする。

「おい。」

すると体が揺すられる。

さすがにこれには目は覚め、朝から顔を覗き込んでくる彼——かみや神谷直希なおきの顔があつた。

「ん・・・直希？」

「おはよう。」

直希の顔を見ると恥ずかしくなつて反射的に顔が熱くなつてしまふ。きっと紅くなつてゐるだろうな、と思うこの朝の慣習をもつ数年繰り返している。

しかし彼はまったく気付いてくれない。きっとこれからも気付いてはくれないと思っている。

「早く着替えてきてね。玄関で待つてゐるから。」

「わかつた。」

それを聞くと彼は部屋から出て行つた。

直希は所謂、幼馴染だ。

親が共働きで朝早く出かけていってしまう私を朝、起こしてくれて、朝ごはんまで作っておいてくれている。私が朝弱いことを知っていて来てくれているので私としてもすごく嬉しい。朝から直希の顔を見れるしね。

「直希、準備できたよ。」

「うん、じゃあ行こうか。」

そう言っ学校へ行く準備のできた私たちは私の家から出て直希の家へと向かう。

直希の家には石段がある。石段があるなんて普通の家ではないことは分かると思うけど、彼の場合は神社だ。この藍川市の中でも大きな神社、藍川神社が彼の家だ。彼は幼いころに両親を亡くしており、今は従妹だという天城琴音さんあまぎことねと一緒に住んでいる。少し嫉妬。そんな嫉妬をしている私は結城水夏ゆづきみなつ、私の一族は結構特殊で“魔術”というものを代々扱っている。きっと直希も知らないと思うし、私もそんなに喋ってはいない。

まあそんなことは関係ない、そう思いたい。

「あ、琴音さん。おはようございます。」

む、あのスタイル。私から見ると刺激的なものがある。

私なんて殆ど無いからなあ、やっぱり直希はああいうのがいいのかな。

「おはよう水夏ちゃん。」

あと、そんなに落ち込まなくてもいいわよ。私はそんな気はないから。」

彼女は私の気持ちには気付いている。

しかし彼は頭の上に大量の疑問符を浮かべてこっちを不思議そうに見ている。まったく、直希は鈍感すぎるよ。

「まあ、早く食べないと遅刻しますよ。」

時間を見ると確かにそんな時間だ。早く食べなきゃ。

「ん、気持ちいいね。」

「そりゃそうだよ。自転車をこいでいる俺の身にもなってくれ。」

「いいの。いいの。」

まったく、直希は私が密着してあげているのに嬉しくないんだろうか。

・・・胸？無いけど何か文句あるの？

「はあ、まあいいか。少し速度上げるぞ。」

「ひゃっ！」

彼が速度をいきなり上げたせいで吃驚して抱きついてしまった。うう、また顔が赤くなってるだろうな。

しかし彼はまったく気にしていないようで・・・やっぱり私って魅力ないのかなあ、身長も低いし。胸もないし・・・。

「やあ、お二人さん。朝からラブラブですね。」

「そ、そんなのじゃにゃいによ・・・」

あまりの恥ずかしさに噛んじやったじゃない・・・

「で、優菜^{ゆうな}は何の用？」

「いや、唯の挨拶だよ。それじゃあ、お二人さん頑張つてね。」

そう言つて私の親友である西野優菜^{にしのだうな}は去つていった。

「なあ、水夏。俺らのどこがラブラブなんだ？」

「さ、さあ？」

とりあえず私はこの鈍感幼馴染にこう答えるしかできなかった。

告白できない自分が悪いのかもしれないけど、直希もそろそろ気付いてほしい。

「とりあえず、急ご？」

「あ、ああ。そうするか。」

遅刻するかもしれない時間だった。

「まあまあ、夫婦そろって登校ですか？」

教室に入って早々、寄ってきたのは優菜。

「だから、俺らのどこが夫婦なんだ？」

そう鈍感発言するのは幼馴染。

「はあ・・・まあいいわ。さっきの話は忘れて頂戴。
それと水夏、大変だと思っけど頑張ってね。」

そういつて彼女は嵐のように去っていった。
やっぱり直希は頭上に疑問符を浮かべている。むう、いい加減気付いて・・・くれないよね。

「おゝい、はじめるぞ・・・。」

いつの間にか担任が来ていたみたいだ。
しかもなんか怨めしそうな目で見てくるし・・・そうか、先生は独身女貴族なんだった。こりゃ、悪いことしちゃったかな。
・・・あ、早く席に着かなきゃ。

「ふう、やっと授業が終わったよ。」

「お前ほとんど寝てただろ。」

「直希、それは言わないで。」

しょうがないじゃない、化学式とか古文とかあーいうのは子守唄だよ。いや、何かの魔術だね。私が言うのもなんだけど。

「まあいいや。ほい、弁当。」

「ありがとう。」

やっぱり学校の楽しみと言ったらこれだね、直希お手製の弁当。こんなに直希に食糧依存して、直希が休んだら食べるものがないかも……。

「ん、やっぱり直希のお弁当は美味しいね。」

「そうか？ありがとう。」

美味しいのはいいんだけどさ周りから嫉妬の視線を受けてるんだよね。女子の視線、後、一部特殊な嗜好を持つ男子のも。直希って競争率高いかも……でも私はきつと一歩リードしてる。

「おい、水夏。食べないのか？」

「あ、ううん。食べるよ。」

こんな美味しいお弁当を食べないなんてもったいない。
後、^{ライバル}恋敵への牽制の意味も含めて。

5 限目からの記憶がない。

なにやら最後に×が何とか、まじゅつし Yが何とかと先生の睡眠魔法を聞いた気がする。

「いや、それはない。」

「そうかな。」

「うん、そうだ。」

そりゃそうだ。私だってあんな魔法は知らない。ほかの魔法は知っているが。

「よし、帰ろうか。」

「うんっ！」

しかしもう私は十二分に覚醒していた。
まじゅつし おさななしみ
先生、直希に屈す。

「うわ、雨が降ってきた。」

毎度通り直希の背に体を預けていると先ほどまで振る気配のなかった雨が降ってきた。

恐らく夕立だろうけど、瞬く間に強い雨に変わった。

「水夏、急ぐぞ！」

「うん。」

自転車の速度が上がったので彼に強く抱きついたのだが彼はまったく反応しない。

むう、やっぱり小さいからかな……。むう。

「よし、水夏。着いたぞ。

早く風呂は入れよ。」

「でも直希君は？」

「俺は大丈夫だ。すぐ家に帰るから。」

「うん、風邪引かないでね。

……。そうだ、一緒に入る？」

すこし、上目遣いで聞いてみる。

「冗談言うな。

それじゃあな。」

そう言っただけで彼は神社へといってしまった。

さっきのは結構本気だったのに、動揺さえもしないなんて……。やっぱり色気ないのかな。

・・・あ、風邪引いちゃう。お風呂入んなきゃ。

お風呂入らないで風邪引いたら直希がお世話してくれるかもしれない、と邪な思いも浮かんだがやっぱり明日も学校に直希と行きたいから入ることにしよう。

次の日、直希はあのあと風邪を引いたらしく学校を休んだ。でも弁当は琴音さんが作っていてくれていて美味しかった、でも直希には負けただけだね。

学校終わってからお見舞いに行ったらすやすや寝ていたので、おでこに気付かれないようにキスをしておいた。
よし、皆から二歩リード。

(後書き)

これはひどい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0188j/>

雨天接吻

2010年11月22日20時32分発行